

# ポジティブな女たち

女たち、ファイト！

## 創立15周年の女性ユニオン東京

一人で入れる労働組合 女性ユニオン東京

書記長 藤井豊味



替え唄等を歌いながら楽しく行っています。

### ■はじめに

私たちのユニオンは、古典的労働組合のもつ闘争的で、ちょっと怖いというステレオタイプイメージを払拭し、働く女性が安心して加入でき、雇用主に対し、対等な立場で当たり前の権利を主張できるようにと、設立当初から様々な工夫を凝らしてきました。

そのひとつとして、まだ、他のユニオンが取り入れるずっと前から、組合旗の色を単なる赤ではなく、紫色（女性が伝統的な男性視点の女性観から脱却し自己再生していく色であるという解釈がある）を混合したワインレッドとすることで、まず旗の色に女性中心の組合であるという主張を取り入れました。また、社前の抗議行動をアクションデーと呼び、争議当事者が中心となってポスターやチラシを作成し、組合員に呼びかけました。パレード等のイベントにおいても、若者や新人の奇抜なアイデアを積極的に取り入れ、時には仮装をし、打楽器などを打ち鳴らし、

### ■成り立ち

女性ユニオン東京は、今から一五年前の一九九五年三月一九日に結成されました。

私は、結成大会が開催されるとの新聞記事を目にし、駆けつけ、その場で加入しました。この頃の私は、雑誌編集の仕事をしていたので、ユニオンでも編集グループに所属し、機関紙「ファイト」作りに専念。九八年頃からは労働相談や団体交渉にも関わるようになり、「女性労働に希望の橋を架けよう！」をモットーに活動を続けてきました。

当初は、「全労協全国一般東京労働組合女性ユニオン東京」という名称で、JR板橋駅前のマンションにある東京労働組合の事務所に居候させてもらっておりましたが、二年後の一九九七年に代々木に手頃なアパートを見つけて、引越しました。

その後、喧々諤々の激論の末に、全労協を

二〇〇〇年に脱退し、独立系労組として、現在の「女性ユニオン東京」という呼称での再スタートを切りました。

そして、〇三年頃から世代交代の議論を始め、〇六年三月で設立メンバーだった二人の専従スタッフが引退し、現体制となりました。

### ■働く女性を取り巻く状況の変化に対して

この一五年の間に、働く女性を取り巻く状況は急速に変わりました。

特に顕著なのが、若年女性層の非正規雇用化です。\*統計で見ると、女性全体の非正規雇用者比率は、三九%（一九九五年）から五三・三%（二〇一〇年）と一四・三%の上昇なのですが、一五〜二四歳女性の場合は、二八・四%（九五年）から五〇%（一〇年）と二一・六%の上昇で、一五年の間に倍近くも激増したことになります。これは、新卒という雇用の入り口から正社員で採用されない女性が激増したということを示すもので

# ACTION



女性と貧困ネットワークと働く女性の全国センター共催の女のメーデーの仮装パレード

もあり、女性労働にとつて、この上なく深刻な事態です。

この非正規雇用労働者のほとんどが有期契約で働かされているので、何度も契約を更改し、何十年同じ職場で働き続けても、正規雇用への転換の法的な義務付けがないので、非正規雇用のまま、放置され、どんなに頑張っても、契約更新というご褒美以外に正当な評価をされることがほとんどなく、挙句の果てに、ちょっとした権利を主張すれば、「契約期間満了更改なし」の一言で容易にクビを切られ、放り出されていくだけの結末が待っているだけの働き方と言っても過言ではありません。

また、様々なハラ・セクハラ・モラハラ・パワハラ・ストーカー被害、この非正規雇用の女性に集中しているのは、圧倒的に弱い立場に置かれているので、報復的に不利益な扱いをされることを恐れ、声を上げられないだろうという予測のもとに行われているからなのです。病気休職する権利さえ保障されていない多くの非正規雇用労働者は疾病即失業となり、結局は貧困を余儀なくされていきます。また、産休で違法な雇止めにあつたり、現行法では育休の対象外とされることが多いので、出産の機会さえないのと同然だとも言えます。これは、人権の問題なのではないでしょうか。女性労働における非正規雇用差別は、少子化問題、強いて言えば次世代の働き手を産めない・育てられないといった未来に暗い影を落とすような事態を定着させているのです。

## ■ 存続し続けるためには

女性ユニオン東京には、今まで一〇〇〇人以上の人が加入しましたが、現組合員はその約一割の一五〇人です。これでは、どんなに切り詰めても組合財政は成り立ちません。これ以上、切り詰め過ぎると、質的な低下や事故につながる危険があります。

個人加入の労働組合に共通する問題とも言えますが、自分の職場での問題が解決すると即退会するという「にわか組合員問題」というものが、相互扶助の精神を無化しているのではないかと感じています。団体交渉等で組合の仲間からたくさん力を借りながら、お返しすることなく辞めていく。まだ、未解決の仲間や新しい仲間のために、また、新しい職場での問題が発生するかもしれないのに、支え続けていくという意思の形成・持続がで

きていないことを、とても残念に思います。

非正規雇用化、労働条件の不利益変更、激増する職場暴力による健康被害、これら女性労働の問題に直面した女性たちからの相談に対応できる人員も不十分です。時間的にも質的にも負担は増大しているのに、人手は減少しているのです。そうすると、一人のスタッフに相談や交渉が集中し、量的に限界を越えた案件を受けざるを得ない。この状況下で、次には相談を受ける側の健康問題が発生します。相談を受ける側の健康状態を維持・回復するためのケアが必要であるのに、それさえできない状態なのです。

昨今の雇用環境の悪さから、多くの女性が就労と失業を繰り返してきています。病院に状態を保ちつらくなってきています。病院に行けば、「ストレスフルな今の会社を辞めれば治る」とのアドバイスを受けながらも、目の前の経済的な不安から辞められずに働き続けている女性の数は測り知れないものがあります。「辞めたら二度と正社員で働けない」、「病氣休職できないので、辞めるか辞めないかの二択しかない」という切羽詰った状況が、女性たちに地獄の苦しみに耐えさせ、健康被害を深刻にしているのです。

そこで私たちは、働く女性たちが、安全な職場で安心して働けるような社会を目指し、今後とも働く女性の全国センターとともに様々な取り組みを行っていきます。広い範囲での経済的に余裕のある階層の方々の経済的な支援を求めていますので、どうかよろしくお願ひします。(詳細は「女性ユニオン東京」のHPをご覧ください。)

\* 出典：社会実情データ図録

<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/3250.html>